

《研究ノート》

2024 年欧州議会選挙と EU 懐疑的右派・極右勢力の躍進 ——その政治的影響とイデオロギーについての 予備的考察

*The 2024 European Parliament Elections and the Rise of Eurosceptic Right/Far-right Forces:
A Preliminary Analysis of their Influence and Ideologies*

白 井 陽一郎*

要旨

2024 年欧州議会選挙の結果を、EU 懐疑的右派・極右勢力の躍進の影響という視点から整理した。選挙後の政治会派再編で 3 派に分かれた右派・極右勢力は、ウクライナ支援については割れるものの、反グリーンディール、反マイグレーション、反セクシャル・マイノリティ、反ブリュッセルという点ではほぼ一致していること、また 3 派合計で 25% にも達する議席数が実際に EU 政治に影響を与えはじめていることを（親 EU グランドコアリションのゆらぎや、右派の支持による第 2 次フォンデアライエン委員会議会承認など）、概括的に示した。そのうえで、3 派それぞれの基本文書の粗訳を提示し、共通する政治方針を析出し、欧州文明の重要性、家族主義・伝統主義、国民の意思の絶対性を根拠とした主権主義、EU の巨大国家化という認識、グリーンディールを専制的官僚的介入主義とみなす非難、そして移民の排除のための欧州の要塞化、といった基本線に注意を引き、今後必要となる研究方向を、EU 懐疑的右派・極右勢力の思想面と組織面の二方向から提示した。

キーワード：EU、欧州議会、極右、EU 懐疑主義

はじめに

EU 統合派グランドコアリションの議席数低減と、EU 懐疑的右派・極右勢力の議席増は、今回の 2024 年欧州議会選挙でも変わらなかった。確固とした長期トレンドである。今後の EU にどのような影響を与えるだろうか。勢力を伸ばした EU 懐疑的右派・極右勢力の動向を整理して、そのイデオロギー的傾向を把握しておきたい。本稿は、「欧州保守改革者」（ECR：European Conservatives and Reformists）、「欧州のための愛国者」（PfE：Patriots for Europe）および「主権国家の欧州」（ESN：Europe of Sovereign Nations）が採択した文書を紹介しながら、それぞれの主張の共通性に注意を引き、今後の本格的な研究を展望することを目的とする。研究ノートの域を出るものではない¹。

構成は以下の通り。まずは欧州議会選挙の結果に親 EU 低減・EU 懐疑増大の長期トレンドの存在を確認し、欧州議会内右派・極右政治会派に生じた再編成とその政治的な意味を整理する（セクション 1）。その際、キリスト教民主主義勢力の EPP（欧州人民党）が、中道左派勢力の S&D（欧州社会民主進歩同盟）および中道リベラル勢力の Renew Europe（欧州刷新）そして場合によ

* USUI, Yoichiro [国際学部 国際文化学科 教授]

¹ 本稿は科研費研究プロジェクトの成果の一部である。科研費研究課題基盤研究（C）「欧州懐疑主義政党が EU の対外政策に与える影響に関する基礎的研究」（課題番号 23K01281）。

ては環境保護主義勢力の Greens/EFA（グリーン／欧州自由連盟）との間の、いわゆるグランドコアリションを修正するのかどうかという点に注意を引く。そのうえで、右派・極右3会派の基本文書を検討し、単一政治グループへの糾合こそ叶わなかったものの、同じ通奏低音が響いていることを強調する²（セクション2）。

1. 欧州議会選挙の結果

選挙結果概要

第10回目となる欧州議会選挙が2024年6月6日から4日間にわたって実施された。EU加盟各国を選挙区とする720議席を争う選挙戦は、投票率が50.74%で前回より微増、第1党の座は予想通りEPP（欧州人民党）が順当に勝ち取った（188議席）。EU懐疑的右派・極右勢力の躍進は予想ほどではなかったにしろ、着実に地歩を広げたと言える。後述のように選挙後3会派に分かれたこの勢力の結成当時の議席をすべて合わせると、187議席となって第1党のEPPとはほぼならんでいた。その後さらに拡大し、本稿執筆時点では192議席となり、単純に足し合わせるかぎりEPPを超えるに至っている。大きな後退が予想されていた左派・グリーン・中道左派・中道リベラルは一定の踏ん張りを見せ、すべて合わせて312議席を獲得した。選挙後すぐにこの312議席が右派・極右3会派に対して、コルドンサニテールを設置した³。焦点となるのがEPPの対応だ。キリスト教民主主義系の中道右派政党グループEPPが、右派・極右に近づくのか。中道左派および中道リベラルと親EUのグランドコアリションを維持していくのか。次の欧州議会選挙までの5年間、EPPの動向がEUの実存を決することになる。

選挙戦の注目点

事前の予想はEU懐疑的右派・極右勢力の大躍進であった。ジャーナリストやシンクタンカー、大学の研究者といったブリュッセル・ウォッチャーたちの多くが、大きな変化を予感していた。また選挙期間中にメディアを賑わしたのは、移民難民問題と農家の反乱であった。ストリートの移民やその犯罪、地中海を渡ろうとする難民たち、農家のトラクターによる都市占拠の映像が、連日、メディアで取り上げられた。しかし、ユーロバロメーターによると、有権者が選挙の争点とみなした優先項目は、移民難民でも農業でもなかった。重要視されていたのは、貧困・雇用・所得であった⁴。とはいえ、欧州委員会が農家の反乱を受けて、農業使用禁止や強制的農地休耕といった措置を緩和したことは、注目に値する。欧州議会の選挙戦がEUの政策を変えたのである。その背景には、右派・極右勢力の支持率上昇があった。欧州委員会の政策変更の直接の要因だとは証明しがたいが、状況的にその影響は否定できない。

² なお、右派・極右勢力のうち、欧州保守改革者グループ（ECR）については、本誌前号掲載の研究ノートで取り上げているので、詳細についてはそちらを参照されたい。

³ Declaration from the S&D, RENEW, GREENS and THE LEFT European Parliament Political Group Leaders In Defence of Democracy. Brussels, 8th of May 2024. <https://www.socialistsanddemocrats.eu/sites/default/files/2024-05/declarationleaders.sd_re_greens.theleft-5.pdf>

⁴ ユーロバロメーターによると、選挙の争点としての優先順位は、貧困・社会的排除との闘い、公衆衛生、経済雇用支援、EU防衛安全保障、気候変動、欧州将来像、移民と難民、法の支配、農業政策、テロリズム・組織犯罪、エネルギー、消費者の権利、人道支援と開発援助、デジタル化、ジェンダー平等・社会包摂、という順であった（European Parliament 2024）。

セカンドクラスの選挙？

欧州議会選挙の検討には、欧州統合進展の有無という視点も重要になる。EU 政治研究では、これまでふたつの点が注目されてきた。ひとつは、欧州議会選挙がセカンドクラスの選挙を脱したかどうかだ。投票率が一つの目安になる（第1表）。全体では微増だが、2014年、19年そして今回の24年と、3年連続で上昇した。ドイツとハンガリーの高さが目立つ。かたや統合推進国、かたや EU 懐疑派の代表格だ。ドイツの 64.74% には及ばないものの、ハンガリーの 59.46% も非常に高い。ちなみにフランスは EU 全体とほぼ同じレベルの投票率で推移している。

投票率でみるかぎり、セカンドクラスの選挙を脱したとはとても言えない。11カ国で前回を下回っている。しかも、選挙区の加盟国内各地に貼られるポスターや SNS 上の訴えは、各国の政党のものがほとんどであり、後述の筆頭候補制の下、論戦を闘わせる欧州政党の存在は薄く、また軽い。EU 市民はどこまでも自国の政党に投票するのであって、欧州政党に投票しているという意識は希薄なままだ。地方選挙とともに、国政選挙の前哨戦もしくは補足的選挙という位置づけであることに変わりはない。

第1表 欧州議会投票率の推移

	2009	2014	2019	2024	
マルタ	78.79	74.80	72.70	72.98	
ドイツ	43.00	43.27	61.38	64.74	
ハンガリー	36.31	28.97	43.36	59.46	
キプロス	59.40	43.97	44.99	58.86	
デンマーク	59.54	56.32	66.08	58.25	↓
オーストリア	45.97	45.39	59.80	56.25	↓
ルーマニア	27.67	32.44	51.20	52.40	
フランス	40.63	42.43	50.12	51.49	
スウェーデン	45.53	51.07	55.27	53.39	↓
EU	42.97	42.61	50.66	50.74	
アイルランド	58.64	52.44	49.70	50.65	
スペイン	44.87	43.81	60.73	46.39	↓
イタリア	66.47	57.22	54.50	48.31	↓
オランダ	36.75	37.32	41.93	46.18	
ギリシャ	52.54	59.97	58.69	41.24	↓
スロヴェニア	28.37	24.55	28.89	41.80	
ポーランド	24.53	23.83	45.68	40.65	↓
フィンランド	38.60	39.10	40.80	40.38	↓
エストニア	43.90	36.52	37.60	37.64	
ポルトガル	36.77	33.67	30.75	36.47	
チェコ	28.22	18.20	28.72	36.45	
スロバキア	19.64	13.05	22.74	34.38	
ラトヴィア	53.70	30.24	33.53	33.82	
ブルガリア	38.99	35.84	32.64	33.78	↓
リトアニア	20.98	47.35	53.48	28.97	↓
クロアチア		25.24	29.85	21.35	↓

資料：欧州議会のサイト＜<https://results.elections.europa.eu/en/>>より筆者作成。ベルギーとルクセンブルグは除外。

ただし、上記のように移民難民と農業が欧州の争点となったことには注目したい。欧州規模で連携しようとする EU 懐疑的右派・極右勢力がこれを利用した部分があるとはいえ、特定争点に関して欧州議会選挙を重要視する有権者が着実に増えてきたことは確かだ。上述のように EU 農業政策は一部ではあるが変更されている（農業規制と休耕地規制）。しかも今回は選挙後に、フランスにて解散総選挙が実施された。この事態は注目に値する。ルペン率いる極右の RN（国民連合）の躍進に、マクロンが反応したもので、日程も欧州議会選挙直後であった（6月30日に第1回投票、7月7日第2回投票）。第1回投票では欧州議会選挙と同様、ルペン率いる RN が大勝利を収め、欧州議会選挙に現れた政治の趨勢が確固としたものであることを内外に強く印象づけた。ただし第2回投票では中道・左派の大連合が形成され、RN は議席を減らし、政権獲得はならなかった。この事例は、欧州議会選挙が国政を動かす契機にもなり得ることを示すものとなった。

筆頭候補制は成功したのか？

欧州議会選挙がセカンドクラスの選挙を脱したかどうかに関連するもう一つの注目点が、筆頭候補制の行方であった。フォンデアライエンは欧州議会選挙に先立って、二期目を狙うことを表明、EPP の筆頭候補に選出されていた。それは筆頭候補制が復活するかどうかを決する動きでもあった。筆頭候補制とは、欧州議会の政治会派が選挙戦に先立って欧州委員長候補を指名し、最大議席数を獲得した会派の候補が（欧州議会選挙の結果を踏まえるという EU 条約の規定を基礎に）欧州理事会から推薦され、欧州議会にて最終承認されるという手続きをいう。あたかも議院内閣制のごとき体裁がとられるわけだ。事前の討論会も二度、三度と開催される。各国有権者の認知度は低いものの、EU にとってこの制度の定着は、デモクラシーの重要な実績となる。

前回の欧州議会選挙では、筆頭候補制が欧州理事会で覆されてしまった。欧州議会で第1党となった EPP の筆頭候補マンフレート・ヴェーバーではなく、メルケルとマクロンの密室協議によりフォンデアライエン現委員長が推薦されたという経緯が報道されている。しかし今回、そのフォンデアライエン委員長が2期目を目指すと公言し、EPP が彼女を筆頭候補に指名した。そして予想通り EPP が第1党となり、フォンデアライエンが欧州理事会から推薦され、欧州議会にて承認された。筆頭候補制が復活したのである。

ただし、フォンデアライエン委員長の最終承認は盤石なものとは言い難かった。欧州理事会の推薦の際に、EPP と S&D と Renew に所属する首脳だけで事前の話し合いが行われ、欧州議会選挙で（当初は）第3党であった ECR 所属の首脳（つまりメローニ）がこの事前の話し合いに招待されなかった。欧州議会選挙の結果を踏まえるという原則には反する振る舞いであった。また二期目が欧州議会で承認されるために必要な過半数の賛成を獲得するためには、従来からのグランドコアリションに加えて、Greens / EFA の助力が必要となった。フォンデアライエンは政策協定のようなものを結ぶことで、S&D や Greens の賛成票を獲得する。これにより全 719 票中、360 票を必要とするも 401 票を獲得、二期目を手中にした。第2表に示したとおり、この承認は事前の予想とは異なり、比較的安定したものとなった。躍進した右派・極右のサイドに歩み寄ることもなく、グランドコアリションをいわば再生させ、安定的に、二期目の委員長就任を実現したのである。

第2表 欧州委員会委員長の議会承認投票

	賛成票	反対票	棄権
ジャック・サンテール 1994年7月21日	260	238	23
ロマーノ・プロディ 1999年9月15日	510	51	28
ジョゼ・マヌエル・バローゾ 第1期 2004年7月22日	413	251	44
ジョゼ・マヌエル・バローゾ 第2期 2009年9月16日	382	219	117
ジャン・クロード・ユンカー 2014年7月15日	422	250	47
ウルズラ・フォンデアライエン 第1期 2019年7月16日	383	327	22
ウルズラ・フォンデアライエン 第2期 2024年7月18日	401	284	15

資料：Agence Europe < <https://agenceurope.eu/en/infographics.html> > より筆者作成

ところが、26名の欧州委員一括承認に際しては、EPPとRenewから80%を超える支持を獲得したものの、S&Dは30%強が反対に回った。Greens／EFAも割れてしまい、賛成票は35%に過ぎなかった。第2次フォンデアライエン委員会が発足するには、右派のECRの票に頼らざるを得ないという状況であった。ECRは所属するPiS(法と正義)が反対に回ったものの、FdI(イタリアの同胞)を中心に賛成票が投じられた。これは、ECRを率いるメローニとフォンデアライエンとの間に、FdI所属のラファエレ・フィットを執行副委員長格で結束基金・改革担当委員に迎え入れるという合意があったためだ。この人事には、S&DやRenewそしてGreens/EFAの大きな反対があった。ECRはPfiEやESNに比べれば穏健派とはいえ、基本的にはEU懐疑的政治会派である。ファシズムに心酔していたというメローニの政治キャリアやその伝統的家族主義(反セクシャル・マイノリティ)、反移民反難民的志向性もある。しかし、フォンデアライエンはこの人事を通した。EPPの賛成票もそのすべてを期待できるわけではないという事情もあった。とくにフランス出身議員はフォンデアライエンがフランス大統領選挙に際してマクロンを応援したという理由で、反対もしくは棄権に回るといった動きもあった。過半数が360票であるが、最終的に賛成370票、反対282票、棄権36票、そして31議員が投票せず、という結果であった(第3表)。フォンデアライエン2期目は、ECRの助力を必要としたという点に留意したい。

第3表 欧州委員会委員の議会承認：政治会派別賛成票・反対票

	賛成票	反対票	棄権	無投票	全所属議員数に占める 賛成票の割合
EPP 178人投票／全188議席	151	25	2	10	80.3
S&D 133人投票／全136議席	90	25	18	3	66.2
Renew 73人投票／全77議席	67	0	6	4	87
Greens／EFA 52人投票／全53議席	27	19	6	1	35.1
PfiE 84人投票／全86議席	0	84	0	2	0
ECR 76人投票／全78議席	33	39	4	2	42.3
ESN 23人投票／25議席	0	23	0	2	0
The Left 43人投票／46議席	0	43	0	3	0
無所属 26人投票／全30議席	2	24	0	4	6.7

資料：HowTheyVote.eu <<https://howtheyvote.eu/votes/170611>> より筆者作成。政治会派の全議席数は投票時のもの。

筆頭候補制は、事前の指名、選挙戦最中の討論会、選挙戦後の議会承認という一連の手続きを完遂し、その過程で政治会派間の対抗関係が公開の討論へと昇華し、現行制度で想定された機能を果たしたのだと言える。ただし、コルドンサニテールの設置が影を落としている。第3党に上り詰めたPfEは、ESNとともに、欧州議会内専門委員会議長人事や様々な調整会合から排除された。当初はECRも対象であったのが、欧州議会内人事はもちろん、欧州委員の人事でも解除されている。上述のように、フォンデアライエン二期目のためでもあった。PfEとESNという極右政治会派が、親EU政治会派に対して、デモクラシーを極めて恣意的に歪めていると批判するのは、形式的な手続きに関するかぎり正当だ。しかし、EU懐疑的で極右的傾向の強い政治グループとどのような関係を取り結んでいけるのか、いくべきなのかは、親EU派にとって、これまでにない難しい課題となっている。

欧州議会内政治会派／欧州政党の存在意義

右派・極右に対するコルドンサニテール設定の是非、正統性という難しい課題が以前にも増して厳しく浮上しているとはいえ、欧州議会選挙自体は、投票率微増、社会運動活発化、筆頭候補制の完遂がとにもかくにも実現され、欧州議会における欧州委員長選出に際しては、政治会派間の熟議的政策協議も行われた。欧州委員会の委員26名の精査および承認投票に至る過程でも、フォンデアライエン委員長と政治会派の間で政策協議が進められた。微々たるものではあるにせよ、セカンドクラスの選挙を脱しようという方向に動いたことは確かだ。とりわけ、今回復活した筆頭候補制にあって、欧州政党がその存在の重さをあらためて実感させている。形式的規範的にも実質的権力的にも、いまやEU政治システムにとってなくてはならない存在だ。欧州統合によるEUの形成を通じて欧州議会の権限が拡張されてきたこの半世紀ほどの歴史的時間は、欧州政党が発展していく過程でもあった。

欧州政党とは、各国政党が結成したイデオロギー別国際連携組織であり、欧州議会に政治会派を創設し、EUに政党デモクラシーのような形を与えてきた。EUは欧州政党に補助金を出し、欧州レベルの政党政治を活性化させようと試みている。民主主義の赤字に悩むEUの修正策のひとつだ。筆頭候補制はそうした発展方向を進めようとするもので、EUの議院内閣制的性格の強化をも意味する。いまだ擬似的なものに過ぎないのではあるが、EU政治に党派の対抗関係を浮かび上がらせてもいる。

EU統合賛成派は、キリスト教民主主義系・社会民主主義系・中道リベラル系の各国政党から構成される。このEPP・Renew・S&Dの連携はグランドコアリションと呼ばれ、EUによる欧州統合を牽引してきた。ナショナル・レベルでこの3派が連立を組むことはもちろんありえるが、レアケースだ。EUレベルではこの3派連合政治が通常のあり方である。この安定性を変えたのが、EU懐疑的右派・極右の躍進であった。中道左派・中道・中道右派のメインストリームの政党が欧州統合と大西洋同盟に関しては必ず一致することで可能になった政治的安定性が、いまやゆらぎはじめている。懐疑主義勢力の成長は、EUに本来の緊張関係を発生させる。必ず賛成してくれるがゆえに権限が与えられてきた機関（欧州議会）が、賛成なくなるとすれば、副作用は大きい。EU懐疑派政治勢力の拡大は、EU政治システムにとって致命的な腫瘍にすらなりえる。

欧州議会をメイン・アリーナとしたこの変容について、正統性問題の視角からも考察が必要だろう。EUでは基本条約が改正されるたびに、欧州議会の権限が拡張されてきた。それは直接的にはEUの民主主義の赤字克服を目的とするが、その含意するところはこの視角からすると実に

大きい。欧州議会の権限拡張は、政府間主義に基づく主権国家間同意の制度枠組に、EU 市民の社会契約という擬制を埋め込んでいくことを意味する。欧州議会をアリーナとした欧州政党政治の発展は、各国の国民主権に根ざした国家合意とは異質な正統性の基礎を作り出すことに帰結する。ところが、いうまでもなく EU に社会契約の主体たりうる国民など存在しない。また後述のように、右派・極右政治会派は主権主義の立場に立ち、国家の主権は共有されてはならないと主張する。国家同意が創りだした政治システムに、EU 市民の社会契約という要素は本来的にはフィットしない。右派・極右政治会派はここを突く。EU は国家同意の域を越えているのではないかという主張だ。右派・極右の反 EU 統合言説に対抗できるような政治言説が、あらためて、グランドコアリション側に求められている。

EU 統合懐疑派勢力が総じて SNS を巧みに駆使するポピュリスト傾向をもつ以上、これは喫緊の課題だ。EU デモス不在でも——地政学的主体化が求められるなか——欧州の安全保障へと統合を深化させるには、その正統性の根拠が——セキュリティゼーションの論理以外に——安定的に構築されなければならない。そのためにも、欧州議会をアリーナとしたイデオロギー対抗関係が、EU による欧州統合に反対する勢力の増大によって、EU レベルに生起してきたという状況が重要になる。このアリーナでの闘技的討議は、EU の正統性基盤を鍛え直す契機にもなりうる。右派・極右の欧州保守主義や愛国主義、主権主義と、左派・極左の民主社会主義や共産主義そしてエコロジー運動などは、埃を被った思想ではなく、欧州議会というイデオロギー対抗アリーナに再び現れ、ポピュリストの手法も駆使しつつ、一定の力を維持している。こうした本来的には EU 懐疑的になりうるイデオロギーを掲げる政治会派と、欧州統合の思想的根幹となるリベラリズムを背負う政治会派との闘技的討議は、EU のトランスナショナル・デモクラシーの実践という観点から重要になる。欧州議会内政治会派とは、欧州統合をめぐるイデオロギー対抗関係を活性化させる役割を担う政治主体であると言うべきであろう。

選挙戦を戦った政治会派を第 4 表にまとめておいた。選挙後、ID（アイデンティティとデモクラシー）は PfiE に再編されることになる。EU 賛成派のグランドコアリションが EPP・S&D・Renew の 3 政治会派であるが、場合によってはそこに Greens/EFA が加わる。上述のように、グランドコアリションの獲得議席数の減少と、EU 懐疑派の右派・極右勢力（当初は ECR と ID、再編後は ECR と PfiE と ESN の 3 派）の議席数増は、長期トレンドとして確立している。今回の選挙戦は、制度設計上の建前としては、欧州政党および欧州議会内政治会派が EU 市民社会の民意を汲み上げ、欧州レベルへと価値を媒介する機能を果たしたことになる。

なお、欧州政党（European Political Parties）と欧州議会内政治会派の関係など、その組織構成や綱領作成プロセス、知的資源の調達法なども、必要な研究課題になる。今後の課題になるが、ここで簡単に触れておく。欧州政党は EU 加盟国を越えて形成される。たとえば、EPP、PES（Party of European Socialists）、ALDE（Alliance of Liberals and Democrats for Europe）などは所属政党が EU 加盟国の外にも広がるが、欧州議会内会派はそのうちの EU 加盟国所属政党で構成される。分かりにくいのは、欧州議会内政治会派も欧州政党と呼ばれる場合があることだ。欧州政党と欧州議会内政治会派の関係を規定する組織構成は——欧州議会選挙用のマニフェスト作成プロセスなど——それぞれに異なり、共通性は見出し難い。また両者の関係も必ずしも良好であるわけではない。たとえば欧州政党である ALDE と欧州議会内会派 Renew Europe の関係などがその事例だ。マクロンがかなり強引に ALDE を欧州議会の中で Renew に再編してしまった経緯

第4表 欧州議会内政治グループ

選挙戦を戦った政治党派	 欧州人民党	 社会進歩同盟	 欧州刷新	 グリーン 欧州自由連盟
	グランドコアリション			
選挙後の政治党派	 欧州保守改革グループ	 アイデンティティとデモクラシー	 左翼グループ	
	 欧州人民党	 欧州社民党	 欧州刷新	 グリーン 欧州自由同盟
	 欧州保守改革グループ	 欧州のための愛国者	 主権国家の欧州	 左翼グループ

- ※ 7ヵ国以上23議員以上が政治党派として認定される。上記の他に無所属議員が存在
- ※ ID（アイデンティティとデモクラシー）グループは選挙後にPFE（愛国者のためのヨーロッパ）グループに再編された。
- ※ 選挙後にESN（主権国家のヨーロッパ）グループが結成され、会派がひとつ増え、全8会派となった。

がある。Greens/EFA（グリーン／欧州自由連盟）はその名の通り、欧州グリーンとEFAが合同で欧州議会に作りだした政治党派だ。極左の政治党派The LeftはEuropean LeftおよびEuropean Left Alliance（以前はGUE/NGLという名称）から構成されている。ECRの場合も（同じ名称の）ECRと欧州キリスト教政治運動（ECPM）の合同党派である。選挙前に存在した極右IDも選挙後に再編成され結成されたPFEも、ともに欧州議会内会派名そのままの欧州政党が設置されている。EU加盟国外に広がりをもつ伝統ある欧州政党ではなく、ターゲットはあくまでもEUだ（ただし、極右組織には欧州規模の連携を目指してきた歴史的経緯があり、その流れは現在のPFEとESNにも入り込んでいる）。それに対して、EPPの場合、CoE（欧州審議会）やOSCE、NATOにもそれぞれの議員会合にグループを形成している。キリスト教民主主義系のこの国際政党連携グループは、欧州国際政治に広く根を張っている。なお、欧州政党や欧州議会内政治党派は、欧州政治財団（European Political Foundation）に支援される。資金管理や政策シンクタンク機能（マニフェストの作成など）を果たすことが期待されているのだが、そのあり方もまた、欧州政党・政治党派ごとに実にさまざまだ。以上の欧州政党の組織構造については、稿をあらためて論じる必要がある。

右派・極右政治勢力の議席拡大と政治党派再編

選挙結果は、グランドコアリションがかろうじて過半数を確保したものの、過去最低の議席数となった（399議席／55.4%）。EU懐疑的右派・極右勢力としてECRとIDをまとめると、過

去最大議席数である(141 議席／19.6%)。選挙戦前に ID から除名された AfD、また EPP から(除名される前に自ら)脱退したフィデス(Fidesz)を含めると、23.1%になり、その他の無所属極右勢力をすべて合計すれば、25%程度の議席に達する。欧州議会選挙史上、EU 懐疑派最大の得票である。Greens/EFA と Renew Europe は大きく減らし、S&D と The Left は現状を維持した。グランドコアリションの一角を占めていた Renew Europe は第4党に落ち込み、かわりに ECR が第3党に浮上した。ただし後述のように、選挙後の再編で ID は Pfe となり、議席数も拡大、ECR は第4党に後退する。

この再編過程は以下の通り。2024 年 6 月末にオルバン(ハンガリーのフィデス)、キクル(オーストリア自由党)、バビシュ(チェコの ANO)が発起人となり、Pfe(愛国者のための欧州)が立ち上げられる。ここにルベンの RN(国民連合)やウィルダースのオランダ自由党、サルヴィーニの同盟など、ID に所属し選挙戦を戦った各国極右政党が雪崩を打って参加していく。所属議員は 84 名に達した。また 7 月には ESN(主権国家のための欧州)が立ち上げられる。AfD 中心に 25 名が参加した。これで欧州議会内の右派・極右勢力は、バルデラが率いることになった Pfe が 86 議席、メローニからモラヴィエツキ(元ポーランド首相)が引き継いだ ECR が 80 議席、AfD が中心となった ESN が 26 議席となった。つまりは 3 会派に分かれることになり、今回も統一会派の実現は叶わなかったのだが、全てを合わせると 193 議席になり、EPP を超える。

以上の流れを別の角度から整理すると、要するに EPP から脱退したフィデスと、ID から追放された AfD がそれぞれ中心となって、Pfe と ESN が結成されたということになる。再編成の動きを作りだしたのはルベンでもメローニでもなく、オルバン、キクル、バビシュであった。脱悪魔化を進めるルベンが、AfD というナチの残滓を引きずる——ドイツ国外起源の移民の追放(remigration)を策謀したことが明らかにされている——“危うい”政党を強い意志でもって追放したという経緯もあり、AfD 中心の ESN が 7 カ国以上 23 議員以上要件を満たせるかどうかは見通しがつかない状況であったが、ポーランドの連盟(Konfederacja)とフランスの再征服(Reconquête!)が参加することになり、正式な政治会派として認定されるにいたった。なお、ポーランドの連盟は Pfe にも 2 名が所属している。ポーランドのこのハードな EU 懐疑的極右政党は、Pfe と ESN の二つの EU 極右グループに地歩を得たことになる。

結局、EPP と S&D が、選挙戦の明暗は分かれたものの、それぞれ第1会派、第2会派となった。しかし、第3会派の座は極右の Pfe が獲得する。スペインの極右政党である VOX が ECR から Pfe に移動したためだ。ECR は第4会派に後退する。注目すべきは、グランドコアリションの一角、Renew Europe が第5会派にまで落ち込んだことである。チェコの ANO が抜けて、Pfe 立ち上げに回ったことも要因の一つだ。ただし ANO が中道リベラルの Renew に所属していたことの方がイレギュラーであり、ANO の移動は“正常化”だとも言えそうだ。ESN は Greens/EFA および The Left よりも下で、最下位の第8会派である。なお、上述のように、S&D、Renew Europe、Greens/EFA、The Left は、ECR、Pfe、ESN に対して、コルドンサニテールを設置した。委員会委員長ポストはもちろん、欧州議会内専門委員会議長ポストも、EU 懐疑的右派・極右会派には与えないはずであったが、ECR がこの防疫線を突破することに成功している。Pfe と ESN の強い批判は前述の通りである。

今回の選挙で躍進した右派・極右政治会派の主要所属政党を第5表にまとめておいた。Pfe はフランスの RN とハンガリーのフィデス、ECR はイタリアの FdI とポーランドの PiS(法と正義)、ESN はドイツの AfD が、それぞれ牽引役であるが、26 議席しかない ESN の場合、他の少数政

党が離脱してしまえば、7 ヶ国以上 23 議席以上という欧州議会内政治会派の要件を満たさなくなってしまう。そのため、AfD は自らの意向を常に優先的に通せるわけではない (Becker and von Ondarza 2024)。ひとつ留意しておくべきが、ウクライナ戦争の帰趨である。現在のところ、フィデスと PiS が折り合うことはない。フィデスは親プーチンでウクライナ支援反対、PiS はその真逆だ。しかし、後述のように反グリーンディールや反マイグレーション、反ジェンダー平等のような、右派・極右が重視する特定政策領域では、選好はほぼ等しい。ウクライナ戦争が何らかの形で停戦となり、対立の火種が当面は消えていくことになれば、環境・移民・性の問題で右派・極右がまとまり、EPP とも連携することは、決して想定し得ないことではない。特定重要法案に中道右派・右派・極右が共同で反対の投票行動をとり、その成立を妨げるという抵抗が可能だ。この連合はベネズエラ・マジョリティと呼ばれ、すでに事例があるが、これについては別稿で論じたい。

EU 政治の変容

EPP が S&D や Renew や Greens/EFA とこれまで通り組んでいくようなことはせず、EU 懐疑的右派・極右の、とくに ECR へ近づいていくとすれば、EU のあり方は変わっていく。たとえ EU 懐疑的右派・極右が反体制派として EU に攻撃的であることをやめ、RN の脱悪魔化のよ

第 5 表 欧州議会の右派・極右政治会派とその主要所属政党 (2025 年 3 月 31 日現在)

PfE (Patriots for Europe) 86 議席 (第 3 党)

国民連合 (RN)	29 議席	フランス
フィデス	10 議席	ハンガリー
同盟 (Lega)	8 議席	イタリア
ANO	7 議席	チェコ
オランダ自由党 (PVV)	6 議席	オランダ
VOX	6 議席	スペイン
オーストリア自由党 (FPÖ)	6 議席	オーストリア
フラームス・ベランフ (VB)	3 議席	ベルギー
シェーガ (Chega)	2 議席	ポルトガル
デンマーク国民党	1 議席	デンマーク

ECR (European Conservatives and Reformists) 80 議席 (第 4 党)

イタリアの同胞 (FdI)	24 議席	イタリア
法と正義 (PiS)	18 議席	ポーランド
ルーマニア人統一同盟 (AUR)	6 議席	ルーマニア
新フラームス同盟 (N-VA)	3 議席	ベルギー
チェコ市民民主党 (ODS)	3 議席	チェコ
スウェーデン民主党 (SD)	3 議席	スウェーデン
真のフィンランド人 (PS)	1 議席	フィンランド

ESN (Europe of Sovereignty and Nation States) 26 議席 (第 8 党)

ドイツのための選択肢 (AfD)	14 議席	ドイツ
リバイバル (Revival)	3 議席	ブルガリア
連盟 (Konfederation)	3 議席	ポーランド
再征服 (Reconquête)	1 議席	フランス

資料：欧州議会のサイト < <https://results.elections.europa.eu/en/> > より筆者作成

うな動きが活発化していき、体制内の野党のような存在になっていくとしても、これまでの EU 共通政策のあり方が変容していくことは必至だ。反グリーンディール、反マイグレーション、反 LGBTQ +そして反ブリュッセル（ただし EU 離脱は封印する）という共通の政策的志向性がみられる PfiE と ECR と ESN のあわせて 25% という議席数は、個別政策領域後退の可能性に加えて、EU の基本条約の改正をさらに困難なものにしている。EU がひとつのボイスを安全保障関連でも確立していこうとすれば、どうしても基本条約の改正が必要になる。しかし 25% にも達した EU 懐疑的右派・極右勢力がそれを許さない。穏健右派 ECR のユーロリアリズムがこの新たな政治状況においてどう具体化されていくのか。EPP が ECR との協力を進めていくことになるのか。そうなった場合にコルドンサニテールを設置した S&D と Greens/EFA と Renew が EPP との関係を悪化させていくことはないのか。以上がポイントになるだろう。

以上、きわめて粗い形ではあるがスケッチしてきた EU 政治変容の可能性は、次のようにまとめられるだろう。これまでの EU は中道左派・中道・中道右派の疑似連立政権のような形で安定的な政治権力を維持し、EU を規範パワーの担い手として育ててきた。EU の超国家性が容認され、主権は共有可能で共同行使すべきであるという理解が定着し、EU 法に依拠して政策統合を進め組織を発展させるユーロリーガリズムが成立していた。しかしこれからの EU は、中道右派・右派・極右が欧州議会内で同一投票行動を取る可能性も浮上してきており、EU は国家ファーストの道具であって超国家性は否認され、主権は不可侵であり加盟国の拒否権は正統であり、権限の権限はあくまでも主権国家に存するという理解が主流となる可能性が高まっている。その場合、イデオロギイ的傾向は欧州文明の優位性とキリスト教共同体の必要性を強調するものとなるだろう。次に節を変えて、右派・極右 3 派の政治方針を検討していく。

2. EU 懐疑的右派・極右政治会派の政治方針

各政治会派を構成する各国の右派・極右政党は、民族主義・主権主義・反ウォーキズムの主張を基本としたポピュリスト手法という共通項がみられるものの、その内実は多様である。ドゥーギンのネオ・ユーラシアニズムへの呼応、反イスラムへの傾倒、分離主義の追求、反ブリュッセルへの固執があり、国家と経済の関係についても、介入主義を非難するネオリベラリズムの主張があれば、福祉ショービニズムへの執着もある。反リベラリズム、反アメリカ、反アトランティシズムを追求する場合もあれば、むしろリベラリズムを主唱することによりイスラムをはじめとした非欧州系移民への敵対性を露わにする場合もある。汎欧州の思想的統一は、実にナチも追求した悲願であるが、これまでに何度も失敗してきた経緯がある（カミュ&ルブール 2023 に詳しい）。EU 批判はこの勢力を糾合する格好の名目となり、欧州議会は好都合なトレーニングアリーナになったと言えるだろう。欧州各国の右派・極右政党は、欧州議会内に政治会派を設けることを通じて、最低限の共通項を確認してきたのである。そこには、排除の論理を胚胎した欧州優位の思想を見出すことができる。こうした欧州の極右の思想については、別の機会にあらためて論じてみたい。

この研究ノートでは、右派・極右 3 会派の基本文書として下記を取り上げてみる。以上の文書それぞれの粗訳を示したうえで、右派・極右会派の通奏低音となる政治的主張の把握を試みる。ECR の文書は『聖ベネディクト・ビジョン——保守的価値憲章』（2024）⁵ を取り上げる。ECR の基本文書については拙稿（白井 2024a）で取り上げているので、ここでは、イギリス保守党が抜けた後のこの組織の、本来的なキリスト教的性格を明確にするという意味をもつ文書を選択し

た。Pfe と ESN はそれぞれ基本となる政治方針文書を取り上げる。Pfe の文書は『私たちの政治プログラム——マニフェスト』(2024)⁶を、ESN の文書は『設立規程第3条政治宣言』(2024)⁷を選択した。ECR も Pfe も ESN も、所属政党間のイデオロギー的距離は遠い。欧州議会内政治会派としてまとまるために最低限の共通性を抽出したこのテキストは、その凝縮性ゆえにかえって、EU から抜けることなく EU をどう変容させようとしているのかを、見やすくしてくれている。もちろん、思想が凝縮されたテキストの行間をどこまでも深く掘り下げるべきなのだが、その機会が別稿に回したい。なお、繰り返すが、以下はあくまでも内容を掴むための粗訳にすぎない。

ECR (European Conservatives and Reformists Group) : 欧州保守改革者グループ

『聖ベネディクト・ビジョン——保守的価値憲章』(2024)

現在は欧州の文化的アイデンティティがリベラル・プログレッシブのイデオロギー的挑戦に曝されている時代である。このイデオロギーは“ワーク”ナラティブと“ジェンダー”セオリーによって表現されている。ECR グループは歴史を通じて欧州の価値を形成してきた持続的な原則を強調する必要性を認識する。保守主義を定義する中核的信条をひとつの憲章に明確にまとめるため、欧州の守護聖人たる聖ベネディクトの精神が刻まれたこの地スピアークに集った。これにより、安定と正義と調和の共同体を今後も育成していくという約束を確認する。

1. 欧州とは歴史的文化的概念である。聖ベネディクトの教えに基づき、我々の文化的遺産と伝統的価値を保全していくことの重要性を強調する。私たちはヘレニズム、ローマ、キリスト教の伝統に深い根をもつ共通のアイデンティティを共有している。
2. 私たちは、モア・ヨーロッパとノー・ヨーロッパという偽装された選択を受け入れない。欧州諸国（ネイション）の間の協力には価値があること、不当な介入は制限されねばならないこと、この制限によって、(EU) 加盟国の独特の文化的歴史的アイデンティティを維持すること、および国家主権を保障すること、以上の重要性を私たちは信じている。
3. 先人の知恵を認識し、謙虚さをもつことの意義を認識する。伝統を守るという私たちのコミットメントは、けっして進歩の拒否ではない。価値を保ち続けることが、安定し繁栄する社会にとっての基盤になるという認識が重要である。
4. 私たちは、思想の多様性を受け入れる社会の大切さを主張する。私たちは、プログレッシブの単一思考と倫理の相対主義を強制しようと狙うグローバリスト・アジェンダ実現の道具として、EU を使おうとすることを固く拒否する。私たちは、開かれた対話と互いに尊重しあった理念の交換を呼びかける。私たちは、パースペクティブの多様性から豊かさが生みだされるのだと認識している。

⁵ European Conservatives and Reformists Group (2024b) *The Benedictine Vision: A Charter for Conservative Values*, Signed in Subiaco on 21 March 2024. <https://mcusercontent.com/82d965dcba0981b7182e9dfd7/files/fa4fda67-617b-36d7-dc36-9548686f7367/ECR_CHARTER_OF_VALUES_Subiaco_2024.pdf> (accessed on March 23, 2024). ECR のその他の基本文書については白井(2024a)を参照のこと。

⁶ Patriots for Europe (2024) *Our Political Programme – Manifesto*. <<https://patriots.eu/manifesto>>

⁷ Europe of Sovereign Nations Group (2024b) *Statutes of the Europe of Sovereign Nations Group in the European Parliament*. As of July 10, 2024, last amended on July 17, 2024.

5. 私たちの進歩は、倫理的熟考をとまなう必要がある。私たちは、その緊急の重要性を強調する。私たちは、イノベーションと道徳のプリンシプルの間の調和した関係を促進していくことによって、経済的な搾取がなく、いつの時代にも通用する価値——この価値こそ道徳的強さと私たちの共有遺産の強靱さに貢献する——を保持した社会の建設を目指していく。
6. 私たちは、信仰と道徳が正義と慈しみの社会を形成する役割を果たすということを認識している。多様な信仰を尊重しつつ適切な統合と共有された道徳プリンシプルが、私たちそれぞれの共同体に及ぼるポジティブな影響を、私たちは認識している。
7. 保守主義は本来的に環境主義の本質を体現している。それはエコロジーという用語の語源に根ざしたものである。この用語は、私たちのエコシステムのバランスを守り抜くという、揺らぐことなきコミットメントを強調するものである。私たちは、メインストリームのグリーン・アジェンダが言うところとは異なり、人間がエコシステムのバランスにとって欠くことなき存在であることを信じている。私たちは、プラグマティックな、科学をベースとした政策の発展を追求する。それは、環境の持続性と経済成長のバランスにとって人間が中心的な役割を果たしていることを認識した政策である。
8. 国家は、紛争の回避および平和的手段による紛争の解決を実現するための、いっそう効果的な方法を探し求めることによって、生存の権利を守らなければならない。私たちは、あらゆる人間の価値を信じる。人間は物事よりも重要な存在である。どのような機関であれ、その措置は人間の生存と尊厳を脅かしてしまうか、あるいはそれを高めるか、そのどちらかである。
9. 私たちの大陸は深刻な人口の危機を経験している。私たちの存在そのものを脅かす危機である。私たちは出生率向上を支援する措置の重要性を呼びかけていく。親であることの高貴な追求こそが家族をエンカレッジする。安定した養育環境は個人と共同体全体の福祉の基礎となるものである。
10. 私たちは、社会の根柢としての伝統的家族の重要性を主張する。伝統的家族は、愛と安定と道徳的指導をとまなうことにより、将来世代の養育という重要な役割を大切に果たしていく。私たちは男性と女性の本来的区別を壊してしまう試みに反対する。そのようなイデオロギーは私たちの社会基盤の骨組みを腐敗させてしまう。私たちは、伝統的家族的価値を保持しながら、尊厳と愛と結合（ユニティ）という時を超越した徳に基盤をもつ共同体の強化促進にコミットしていくことを、ここに確認する。
11. 私たちは、能力主義の教育システムを強く擁護する。このシステムのもとで個人は力をつけ、そのポテンシャルを最高レベルに引き上げ実現するのである。私たちは教育機関におけるイデオロギー的アジェンダの適用を拒絶する。そして批判的思考を涵養する環境を促進する。
12. 私たちは、表面的な不和や一過性のトレンド（ウォーキズムやジェンダー理論）は混乱をもたらすと認識している。欧州ビジョンは、真に私たちの共同体に影響を与える本質的に重要な問題へと、焦点を合わせ直さなければならない。私たちが追求するのは、持続的な価値に基盤をもった社会の構築であり、そのような社会の構築による全構成メンバーの安定と調和と福祉の促進である。

2024年3月21日 スピアーコにて署名

ECR は、欧州という単位の表象（ヘレニズム、ローマ、キリスト教の伝統に深い根をもつ共通のアイデンティティ）を土台にすえる。EU はけっしてこの欧州の伝統を体現したものではなく、プログレッシブ・グローバリストの道具に使われかねないと批判される。信仰と道德の重要性が説かれ、伝統的家族主義に基づいてジェンダー平等が拒否され、家族的価値と共同体の紐帯の連続性が強調される。ウォーキズムおよびジェンダー理論の否定は論理必然的だ。イスラム非難を直接的に想起させるワードはテキストに埋め込まれていない。リベラリズムの観点からイスラムを非難する構成にはなっていない。この点、PfE の主要メンバー政党であるオランダ自由党とは明確に異なる。エコロジー概念を人間中心主義的に読み替えるくんだりや、能力主義的教育システムを主唱する部分は、意図としては、前者がグリーンディール批判、後者がウォーキズム批判だと読み取れるが、突き詰めれば、欧州保守主義の一つの思考パターンを見いだせるかもしれない。この点は検討課題にしておきたい。

PfE (Patriots for Europe Group) : 愛国者のための欧州グループ

『私たちの政治プログラム——マニフェスト』(2024)

欧州の諸国家は、歴史的な分岐点にある。EU はかつて、2つの世界大戦と数十年に及ぶ分断により破壊されたのちの、和解への願望に根ざした夢のプロジェクトであった。それがいまや、欧州の人びとに対峙するようになってしまった。欧州の故郷を構成する欧州の諸国家、地域、小さなコミュニティに住まう人びとの意思とは異なる利益を追求するようになってしまった。

欧州の市民にはほとんど知られていない制度、欧州の市民から引き剥がされた制度が——強力なグローバリストの諸力、選挙で選出されない官僚、ロビイスト、利益団体が、多数派の人びとの声を、大衆デモクラシーを蔑みながら——国家を置き換えようとしている。何へと？ 欧州中央集権国家へ、である。

この6月の欧州議会選挙はそれゆえ、世代を超えた、実存的重要性を有する。今日の政治的亀裂はもはや、保守主義者とリベラルの間に、あるいは右翼と左翼の間に、生じるものではない。そうではなく、新たな欧州“巨大国家”(a new European “superstate”)のさきがけになろうとする中央集権主義者と、私たちが大切にしている諸国家の欧州を守り強化するべく闘う愛国者および主権主義者との間に、亀裂が走っているのである。欧州大陸すべての愛国者の党、主権主義者の党が勝利を勝ち取るために協力してはじめて、私たちは子どもたちへの遺産を守り抜くことができるのである。

私たちが信じる欧州は、次のような欧州である。

- 強く、自尊心あり、独立した、相互協力により生き抜くことを自由に決意した諸国家の欧州。
- 欧州の諸国民に委託された、説明責任を担う国家に根ざした制度と正統性を通じて、統合を進める欧州。
- 国民共同体の意思をもって、国内でも国外でも国民の利益を追求し、その利益の充足を妨げる依存から自らを解放した、ゆらぐことなき主権者たちの欧州。
- 平和と対話にコミットし、あらゆる脅威から自らを守る準備ができていく欧州。
- 欧州のアイデンティティ、伝統、慣習そしてギリシャ・ローマ、ユダヤ教・キリスト教の

遺産という実りを守り言祝ぐ欧州。

- 国家、歴史、生活スタイルの多様性を大切に守り抜くとともに、時代の流行に応じて変化すべきだと最後通牒的に命令してくるようなものに抵抗していく欧州。
- 真の自由、基本権、人間の尊厳を擁護するとともに、そうした自由を制限した規定し直そうとするたくらみに断固として抵抗していく欧州。
- 競争力があり、生産力があり、効率的で、知性でも科学でも経済でも、革新と優越性と進歩の大陸として偉業を成し遂げる欧州。
- 欧州市民の大多数の意思に従って、国境を守り、不法移民を止め、文化のアイデンティティを保護すると決意する欧州。
- 政治的、経済的、宗教的、文化的領域のあらゆる脅威から国民を守るよう準備している諸国家の欧州。
- 自らに与えられた委任とルールを尊重し、けっして自らの権限を越えることなく、補完性と比例性の原則にしたがい、欧州予算を通じた圧力によって国家主権への攻撃を正統化するようなことのない欧州。
- 欧州制度へのさらなる国家主権移譲を拒否する諸国家の欧州。
- 国家の拒否権を尊重する欧州。
- 外交は加盟国の主権の基本的要素であり、同じ行動を取るよう他者に要求するようなことなく、各国家が自由に決定できるものであることを認識している欧州。

私たち欧州の愛国勢力は、私たちの制度を取り戻し、欧州の政策を諸国家や諸国民に奉仕する方向へ修正することによって、私たちの大陸の未来を欧州の諸国民の手に取り戻すことをここに誓約する。連邦主義より主権を、独裁より自由を、そして平和を優先すること、これこそが私たち愛国者のマニフェストである。

移民嫌悪の志向性は当然のことながら抑えられている。どこまでも“不法”移民の問題が文化アイデンティティの維持という課題と結びつけられる。反イスラムを想起させるワードはテキストには皆無だ。脱悪魔化を進めるためのワード選択は、公式文書ではなおさら慎重にならねばならない。どこまでもEUをスケープゴートにする言説戦略である。現在のEUは強力なグローバルリストの諸力に動かされ巨大国家（superstate）になろうとしており、主権国家の存在を否定している。そのためデモクラシーを破壊している、という認識だ。この場合のデモクラシーは、どこまでも国民の意思のみを尊重するという政治方針と同義である。現在の欧州の分断は、グローバル化を進めるための巨大国家を創ろうとする中央集権主義者と、愛国者・主権主義者との間の分裂だというナラティブが提示される。国民共同体の意思を絶対視する発想だ。ベースとなるヨーロッパ認識はECRと同様で、ギリシャ・ローマ、ユダヤ教・キリスト教の遺産が強調される。このヨーロッパ文明こそが真の自由を守るという思想だ。特筆すべきは、国際組織における共同決定が主権国家の意思を拘束するという事態——国際法の進化を通じた国際組織の発展——を否定する強固な意志であろう。デモクラシーは国民主権に基づくものであって、けっして国境は越えないのである。国民の意思を絶対視するポピュリストの思考が根柢に存在すると言えるだろう。こうした思想が、所属政党それぞれの国内での実際の言動から構成される政治プロセスの把握を、

次の研究課題としたい。

ESN (Europe of Sovereign Nations Group) : 主権国家の欧州グループ

『設立規程第3条政治宣言』(2024)

欧州文明は危機にある。誤導された政策、グローバリストのアジェンダ、ウォーキストのイデオロギー、政治的イスラムの侵入に対する無抵抗が、欧州の諸国民の運命を決してしまう。この世界で唯一故郷と呼ぶべき場所が、奪い去られてしまうのである。

そんなことはさせないというのが、私たちの決意だ。ギリシャ・ローマや聖書の諸伝統、科学の達成に根ざすことによって、私たちは欧州の諸文化とそれぞれのネイティブ・アイデンティティを守っていく。

変化の激しい世界にあって、私たちは故郷からなるひとつの欧州 (a Europe of homelands) という理念を強固に支えていく。それは、主権的民主的国民国家の欧州共同体であり、共同した方がより良く管理できるあらゆる領域において、諸国民のベネフィットのため平和裡に協力していく共同体である。

私たちは共同市場の維持については支持するものの、官僚制を削減するべくつとめ、欧州単一国家の建設には強固に反対する。EU を巨大国家 (superstate) にしていくために国際的な危機を誤って利用するということが、2008 年世界金融危機以降、継続して行われてきたのであるが、そのようなことは2度とあってはならない。

とくに問題なのが、気候変動は人間が引き起こしたものだという独善的な決めつけである。EU が人びとの生活のあらゆる領域に専制的な規制というやり方で介入していくようになったのは、このためである。私たちは、グリーンディールおよびそのための計画経済を押し戻し、市場原則、企業、科学的進歩を優先する。エネルギーを適切な価格で安全に供給することは、とくに重視する。これらなくして欧州経済の競争力向上と成功を成し遂げることはできない。

管理なき大量移民は、私たちの故郷を壊滅的なものに作り替えてしまう。わたしたちは、マイグレーションこそ、欧州の諸国家の実存的脅威だと考える。欧州レベルの協力以外に、私たちの対外国境を効果的に守り——それは真の要塞欧州を作り上げることである——私たちの国家への不法移民の流入を止める方法はない。

私たちは将来世代のための指導原理として、LGBTQ およびダイバーシティのアジェンダを遂行していくことに反対する。私たちは伝統的な家族を促進する。それは父、母、子供たちから構成されるものである。またそれにより、私たちは欧州の人口減少と闘っていく。

域外には統一と強さを示し、域内では国家の多様性 (national diversity) を向上させる。これが主権国家の欧州による協力のフォーミュラである。

2024—2029 期の優先課題

- 欧州の文化とアイデンティティの維持：私たちが共有する伝統と価値の枠組みのなかで欧州の文化的歴史的アイデンティティを促進し、守っていく。
- 国民国家の主権と協力：EU の意思決定過程のなかでナショナル・レベルの議会 (national parliaments) の役割を強化し、ローカル・ガバナンスの強化と EU の中央集権化の縮小の

ために補完性（subsidiarity）を促進していく。

- 気候政策の再評価：グリーンディールを廃止して、科学のイノベーションを奨励しながら環境問題に対するマーケット・ベースの解決法を促進する新たな立法を支援していく。
- 大量マイグレーションの管理：不法移民を防ぎ国家安全保障を確保するために、厳密な国境管理措置を執行し、国連マイグレーション・グローバル・コンパクトを停止する。

基本の認識は、グローバリスト EU のウォーキズムが、政治的イスラムと表現される異分子の侵入とともに、欧州文明の危機をもたらしている、というものだ。ギリシャ・ローマ・聖書の諸伝統は守られねばならないのに、その伝統とは異質な巨大単一国家 EU の官僚制がこの危機のもう一つの要因だとみなされる。その最たるものが、気候変動は人間が引き起こしたという独善的な決めつけだという。ESN は気候変動の人為起源否定論を公然と表明している。官僚制的巨大中央集権国家 EU が、気候変動の人為起源という独善的な決めつけによって、各国の国民の生活に専制的に介入していくというナラティブだ。ESN はこの専制的介入を、計画経済とも呼ぶ。市場原則に基づく企業が科学的進歩とともに活動していくことが求められているのに、EU がこれを不可能にしているという。自由な経済活動と技術が問題を解決していくのに、誤ったイデオロギーに基づく官僚制巨大国家 EU がこれを計画経済的専制的に抑圧している、などという状況認識が、公式文書に記載されていることに、注意を引いておきたい。他方で、ESN は管理なき大量移民が欧州の諸国民の故郷を破壊するという認識のもと、移民締め出しのための欧州要塞の構築という目的では、欧州レベルの協力を推奨する。そして ECR、Pfe と同じように、LGBTQ の権利およびダイバーシティの追求を否定する。

以上、ECR と Pfe と ESN の基本文書を概観してきた。欧州文明の重要性、家族主義・伝統主義、国民の意思の絶対性を根拠とした主権主義、EU の巨大国家化という認識、グリーンディールを専制的官僚的介入主義とみなす非難、そして移民の排除のための欧州の要塞化、といった基本線が浮かび上がってくる。何度も繰り返すが、所属政党の各国内での言動は、実に多様だ。欧州レベルの政治集団を構築していくうえで、EU は都合のよい非難対象であり、欧州議会は格好のトレーニングアリーナとなっていることに、注意を引いておきたい。

問題は、すでにふれたように EPP の動向だ。本稿で確認したイデオロギー傾向に親和性をもち、右派・極右 3 派との共同歩調に違和感を感じなくなる EPP 所属議員が、今後どれほど出てくることになるのか。あるいはすでにどれほど存在しているのか。グリーン・中道左派・中道リベラルが志向する価値そして政策では組めないというキリスト教民主主義系中道右派政党が、次の欧州議会選挙までの 5 年間に、どれほど増加していくだろうか。あるいはどれほどの所属政党、議員たちが、ECR・Pfe・ESN のラインに近づいていくだろうか。本稿が抽出した右派・極右勢力の共通ラインに関するかぎり、政策論として EPP が組めないことはない。もちろん、政治的にはまた別の議論が求められる。

おわりに

今後の研究課題は、欧州の右派・極右の思想面と組織面の二つに分けられる。前者については、各国の右派・極右政党の思想的多様性を把握した上で、欧州議会の右派・極右会派と、所属の各

国政党との間の思想的緊張関係が生じていないかどうか、とくに欧州という概念および国民という概念の理解の仕方に差異が生じていないかどうかを、把握していきたい。加えて、各国の右派・極右政党が、グリーンディールとマイグレーションとセクシャル・マイノリティーとイスラムそしてロシア的なものおよびアメリカ的なものに関して、どのようなイデオロギー的偏向および攻撃の先鋭化を示しているか（脱悪魔化は本当に進んでいるのか）、それが欧州議会の政治会派に属し活動していくなかで、ソフト化しているといえるのか、あるいはそのためかえて国内支持層では先鋭化が進んでいないかどうか、実証的に見定めていくことが必要になる。欧州議会内の右派・極右議員の発言や投票行動も追いつつ、ディスコースの検討を進めていきたい。もうひとつ、組織に関しては、欧州議会の右派・極右会派の共通思想構築過程を可能にする熟議プロセスの制度化のあり方を把握してみたい。これは欧州議会内政治会派と欧州政党と欧州政治財団（ファンデーション）の間の公式・非公式の制度のあり方を探るという研究課題になる。

欧州レベルの政党政治の研究を、EU 懐疑的右派・極右勢力への視点から進めていこうとするこうしたアプローチ法は、非国家的連邦制ともいうべき EU 政体の構造と機能の一端に光を当てることになるという意味において、EU 政体論への重要な理論的貢献となるだろう。

参考文献

- Becker, Max. and von Ondarza, Nicolai. (2024) Divided But Dangerous: The Fragmented Far-right's Push for Power in the EU after the 2024 Elections. *SWP Comment*, No.44 October 2024. < https://www.swp-berlin.org/publications/products/comments/2024C44_Far-right_EP_Web.pdf > (accessed on February 7, 2025).
- Bulgarian News Agency (2024) *Vazrazhdane Boast Own Role in Formation of New EP Group*. Sofia, 11.07.2024 12:34 (BTA) . <<https://www.bta.bg/en/news/bulgaria/706463-vazrazhdane-boast-own-role-in-formation-of-new-ep-group>> (accessed on February 7, 2025).
- EPP (2025) *Europe needs more growth and jobs – Enhancing competitiveness by cutting back bureaucracy and over-regulation*. Leaders' Retreat, 17 & 18 January, Berlin, Germany. <<https://www.epp.eu/files/uploads/2025/01/EPP-Retreat-Growth-and-Jobs-statement.pdf>> (accessed on February 8, 2025)
- Europe of Sovereign Nations Group (2024a) *Political Program*. < <https://esn-party.eu/political-program> > (accessed on February 7, 2025).
- Europe of Sovereign Nations Group (2024b) *Statutes of the Europe of Sovereign Nations Group in the European Parliament*. As of July 10, 2024, last amended on July 17, 2024.
- European Conservatives and Reformists Group (2009) *The Prague Declaration*. < https://ecrgroup.eu/files/prague_declaration.pdf > (accessed January 24, 2024).
- European Conservatives and Reformists Group (2024b) *The Benedictine Vision: A Charter for Conservative Values*, Signed in Subiaco on 21 March 2024. <https://ecrgroup.eu/files/ECR_CHARTER_OF_VALUES_Subiaco_2024.pdf> (accessed on March 25, 2025).
- European Parliament (2024) *European Parliament Euro Barometer: Executive Summary*, SPRING 2024 EB 101.1.
- Fontana, Iole., and Rosina, Matilde. (2024) The Tools of External Migration Policy in the EU

- Member States: The Case of Italy. *Journal of Common Market Studies*, Volume 62, Issue 6, pp.1448-1474.
- Forum for Democracy International (2024) *The Sofia Declaration*. 12 April 2024. < <https://fvdinternational.com/article/the-sofia-declaration> > (accessed on March 25, 2025).
- Genga, Nicola. (2024) From “Front” to “Rassemblement National”, Guiso, Andrea. and Pasquinucci, Daniele., eds., *Anti-Europeanism, Populism and European Integration in a Historical Perspective*, Routledge, pp.91-106.
- Geslin, Laurent. and Bourgery-Gonse, Théo. (2025) France’s far-right asks EPP to end the Green Deal together: The move is yet another blow to the EU’s long-suffering Green Deal. *Euractiv*, Jan 27, 2025 12:47. < <https://www.euractiv.com/section/politics/news/frances-far-right-asks-epp-to-end-the-green-deal-together/> > (accessed on March 25, 2025).
- Griera, Max. (2025) Let’s kill the Green Deal together with the far right, ECR tells EPP: The Christian Democrats should abandon their leftist allies, argues Giorgia Meloni’s political family. *POLITICO*, January 30, 2025 4:00 pm CET. <<https://www.politico.eu/article/lets-kill-the-green-deal-together-with-the-far-right-ecr-tells-epp/>> (accessed on February 7, 2025).
- Griera, Max., Guillot, Louise., Braun, Elisa. and Gros, Marianne. (2025) Fact-check: Did the European Commission really pay NGOs to lobby for the Green Deal? Confidential contracts seen by POLITICO do not tend to support claims that the executive paid green groups to lobby on its behalf. *POLITICO*, February 4, 2025, 6:00 am CET. < <https://www.politico.eu/article/fact-check-european-commission-ngo-lobby-green-deal-activist/> > (accessed on March 25, 2025).
- Identity & Democracy (2023) *Declaration of Antwerp*, signed on June 23, 2022. <<https://id-party.eu/f/declaration-of-antwerp-signed-on-june-26-2022>> (accessed on March 25, 2025).
- Identity & Democracy (2019) *Statutes of the Identity and Democracy (ID) Group in the European Parliament*. <https://d3n8a8pro7vhmx.cloudfront.net/kantodev/pages/102/attachments/original/1582196570/EN_Statutes_of_the_ID_Group.pdf?1582196570> (accessed February 9, 2024).
- Lormer, Marta. (2023) National, Popular, or Neither? Sovereignty in the Rassemblement National’s Contestation of European Integration, in Rone, Julia., Brack, Nathalie., Coman, Ramona., and Crespy, Amandine., eds., *Sovereignty in Conflict: Political, Constitutional and Economic Dilemmas in the EU*, Palgrave Macmillan, pp.165-182.
- Niglia, Federico. (2024) From “Front” to “Rassemblement National”, Guiso, Andrea. and Pasquinucci, Daniele., eds., *Anti-Europeanism, Populism and European Integration in a Historical Perspective*, Routledge, pp.107-116.
- The Party of European Socialists (2025) *The EPP attack against environmental NGOs is harmful*. January 31, 2025. <<https://pes.eu/environment/the-epp-attack-against-environmental-ngos-is-harmful/>> (accessed on February 7, 2025).
- Patriots for Europe (2024) *Our Political Programme – Manifesto*. < <https://patriots.eu/manifesto> > (accessed on March 25, 2025).

Progressive Alliance of Socialists and Democrats, Renew Europe, Greens and the Left (2024) *Declaration from the S&D, RENEW, GREENS and THE LEFT European Parliament Political Group Leaders In Defence of Democracy*. Brussels, 8th of May 2024. < https://www.socialistsanddemocrats.eu/sites/default/files/2024-05/declarationleaders.sd_re_greens.theleft-5.pdf> (accessed on March 25, 2025).

Sorgi, Gregorio. and Grier, Max. (2024) EPP's Flirtation with Far Right in Parliament sparks EU Budget. POLITICO, October 23, 2024. <<https://www.politico.eu/article/european-peoples-party-far-right-sovereignists-european-parliament-budget-migration-deportation-centers/>> (accessed on March 25, 2025).

Weisskircher, Manès. (2023) Direct Democracy and the Impact of the Alternative for Germany (AfD) ? “Populist” Demand for Popular Sovereignty as Latent Political Conflict, in Rone, Julia., Brack, Nathalie., Coman, Ramona., and Crespy, Amandine., eds., *Sovereignty in Conflict: Political, Constitutional and Economic Dilemmas in the EU*, Palgrave Macmillan, pp.143-164.

Wolff, Sarah. (2024) The New Pact on Migration: Embedded Illiberalism? *Journal of Common Market Studies*, Volume 62, Annual Review, pp. 113-123.

ヴァイス, フォルカー (2019) 『ドイツの新右翼』(長谷川晴生訳) 新泉社。

臼井陽一郎 (2024a) 「欧州議会と欧州懐疑主義：欧州保守改革グループ (ECR) の場合」『新潟国際情報大学国際学部紀要』第9巻、79 - 96 頁。

臼井陽一郎 (2024b) 「2024 年欧州議会選挙について：民主主義の発展か、EU 政治の停滞か」国際問題研究所研究レポート、2024 年 7 月 3 日。< <https://www.jiia.or.jp/research-report/2024/08/13/security-fy2024-01.pdf>>

カミュ, ジャン＝イヴ&ルブール, ニコラ. (2023) 『ヨーロッパの極右』(南祐三監訳・木村高子訳) みすず書房。

ペリノー, パスカル (2023) 『ポピュリズムに揺れる欧州政党政治』(中村雅治訳) 白水社。

NUIS Journal of International Studies, No.10, April 2025

[Abstract]

The 2024 European Parliament Elections and the Rise of Eurosceptic Right/Far-right Forces: A Preliminary Analysis of their Influence and Ideologies

USUI Yoichiro *

The paper examines the results of the 2024 European Parliament elections in terms of the rise of right- and far-right forces, namely the ECR, the PfE, and the ESN. Although there are disagreements regarding pro- or anti-Putin positions, their common political arguments include opposition to the Green Deal, migration policies, sexual minorities, and Brussels. The fact that these groups have secured 25% of the parliamentary seats clearly shows their impact on EU politics as a whole. For instance, the pro-EU grand coalition has been weakened, and the parliamentary approval of the second Von der Leyen Commission would have been impossible without the support of an Italian group within the ECR. After examining the influence of the rise of right- and far-right forces in the Euro polity, the paper analyzes the foundational documents of the ECR, the PfE, and the ESN, and clarifies their common ideological claims. These include the superiority of continental Europe; the importance of traditional family structures, national traditions, and the absolute will of the people; sovereigntism; criticism of the superstate EU; rejection of the Green Deal as a tyrannical bureaucratic intervention; and the fortification of the EU to exclude immigration, among others. Finally, the paper suggests future research agendas from two perspectives: the ideology of right- and far-right forces and their institutional organizations.

Keywords: the European Union; the European Parliament; far rights; Euro-scepticism

* Professor, Faculty of International Studies
Niigata University of International and Information Studies

